# 男3人ですなる温泉旅行といふもの。

温泉といえば、家族、恋人と……。否、男の旅の目的地でもいいではないか！ 雲仙温泉1泊男旅、何を観るか、何を語るか、どう浸かるか。

男旅に今回、参加したのは、二俣公一さんと、友人の津田直さん、藤戸剛さん。訪れたのは1935年開業の〈雲仙観光ホテル〉。山小屋を思わせる外観が美しい老舗ホテルで、建築や歴史に触れながら温泉を楽しむという趣向である。

2004年から8年にわたり順次改修された宿が目指したのは、原点回帰。客室や浴室といった既存設備を改修しつつ、開業当時あった図書室やビリヤード室などクラシックの名にふさわしい空間を復活させた。長い歴史が生み出す世界観を損ねることなく、必要な改変を加えていることに、皆感心しきり。話は、雲仙にこの建築がある必然性や、伝統ある建物をいかに保存するか？ まで広がる。

ここで楽しめるのは、皮膚に良いとされる硫黄泉。その湯に浸かりながら、ドーム天井やアーチ窓に目を奪われたり、湯の鉄分の強さに驚いたり。「個性がまったく違う3人だから、話していて面白いんですよ。常に新しい発見がある」と藤戸さん。男旅のモチベーションは知的好奇心らしい。

そんな状態が少し変化したのは、バーでのこと。肩の力がすとんと抜け、周囲の空気に包まれる一瞬。「バーに入った時、何かのスイッチが切り替わり、互いの距離がより縮まった気がします。濃密な話をするために作られた空間だからでしょうね。設計者の思いが伝わってくる」（二俣）。結局、バーでも話し足りなかった彼らは、客室のベランダで午前2時まで立ち話。「一緒に湯に浸かったせいか、温泉のごとく話題もどんどん湧いてきて（笑）。男3人でも十分楽しめる包容力が、このホテルにはある気がします」（津田）

元来、温泉と書いて〝うんぜん〟と読まれていた、この地。プリミティブな温泉体験は、人と人との距離をグンッと近くする。

1 外国人客誘致による外貨獲得のための国策として建設。日本の在来建築にハーフティンバー様式をミックスした外観が印象的だ。2003年登録有形文化財に登録。
2 ホテルの中でも、最も開業当時の面影を残すバーで杯を交わす。オリジナルカクテル2種などを飲む。
3 特別室の照明は、開業時にダイニングで使われていた。
4 19世紀に活躍したデザイナー、ウィリアム・モリスの壁紙が使われたプレミアムツイン。同タイプの壁紙は3種。
5 ドーム型天井とアーチ窓、ステンドグラスが配された浴室。泉質は酸性・含鉄・含硫黄-アルミニウム-硫酸塩泉。
6 1,500冊の蔵書が揃う図書室。中には昭和初期の稀少本も。ドリンクをオーダーして飲みながら読書もできる。
7 200畳の広さを誇るダイニングでは、かつてダンスパーティも開かれたという。衣擦れの音が聞こえるようだ。
8 バーに残された開業当時のガラス。現在では作れないので貴重だ。床に張られたタイルも味がある。

profile

**津田 直** ●写真家

主な写真集に『SMOKE LINE』『SAMELAND』などがある。現在、来春の発表へ向けて、リトアニアで撮影した新作を制作中。

**藤戸 剛** ●FUJITOデザイナー

2002年メンズアパレルブランド〈FUJITO〉をスタート。14年より九州のもの作りを集めた合同展示会『thought』を開催している。

**二俣公一** ●空間・プロダクトデザイナー

〈CASE-REAL〉〈KOICHI FUTATSUMATA STUDIO〉両主宰。近作に〈イソップ 金沢店〉〈CIBONE CASE〉〈東大和田の家〉など。

ホテルから徒歩10分ほどの雲仙地獄。地中から噴き出す蒸気と熱気、硫黄の香りが立ち込める。雲仙温泉の源泉。津田さんと藤戸さんは、ここで早朝散歩を楽しんだという。

## 雲仙観光ホテル

●雲仙温泉／長崎県

●長崎県雲仙市小浜町雲仙320☎0957·73·3263。全39室。1泊37,950円〜。地上3階・地下1階建ての建物は、鉄筋コンクリート造と木造の混構造。竹中工務店が設計したホテルの第1号。JR諫早駅から車で60分。長崎空港、諫早駅との間に無料送迎バスあり（事前予約制）。

## ジオパークで〝長い水の旅〟の一端に触れる。

「少し山を下りて、水に触れに出かけませんか？」。津田さんの言葉に誘われ一行が向かったのは、島原市にある〈湧水庭園 四明荘〉（写真左）と、普賢岳の麓にある〈内野湧水〉（写真右）。前者は大小3つの池に1日約3,000トンの水が湧出する庭園で、後者は良質の水がこんこんと湧き出る水源。「山に降った雨が長い時間をかけて湧水になったり、温泉になったり。そんな水の旅を体感できるのが島原半島のスゴイところだと思います」（津田さん）